東京・葛西城址（かさいじょう）(1)

1　所在地　東京都葛飾区青戸七丁目

2　調査期間　第六次調査　一九八〇年（昭55）九月～一九八一年二月

3　発掘機関　葛西城址調査会

4　調査担当者　古泉　弘

5　遺跡の種類　城館跡

6　遺跡の年代　中世～近世

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

葛西城址は中川右岸の自然堤防上に立地する中世の城館跡である。関東管領上杉氏によって一五世紀に築かれたと推測されており、重臣の大石石見守が在城していた。一六世紀になると後北条氏の支城となり、天正一八年（一五九〇）に後北条氏の滅亡とともに落城した。その後この場所には、徳川将軍家が青戸御殿を建てている。

（東京東北部）

調査地は葛西城の主郭中央で、環状七号線の建設に伴い葛西城の中心を南北に貫く形で調査を行なった。

木簡は、八一号井戸と八六号土坑からそれぞれ一点が出土した。八一号井戸は、木桶の井戸側を有し、木桶の外側には砂岩や石塔などを円形に配置した石組みが設けられており、石組みの基底部には板碑が敷かれていた。この井戸は、天文七年（一五三八）の後北条氏による葛西城奪取後に造られたと考えられている。八六号土坑も中世の遺構で、時期は一六世紀と思われる。

8　木簡の釈文・内容

八一号井戸

(1)　「〈□□こ　(106)×30×3　039

八六号土坑

(2)　「（梵字）。□」　213×39×6　011

(1)は上部に切り込みを有し、下部は欠損している。切り込み部分は端部の一部が欠損している。

(2)はほぼ完形に近い状態である。頭部は山形になっており、穿孔を有する。墨書は上部に梵字が一文字だけ認められるが、判読でき

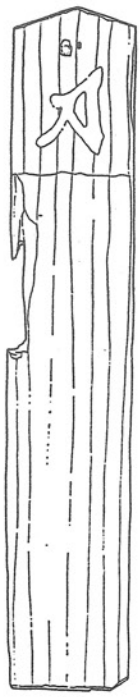
ない。下部は墨で塗りつぶされている。

9　関係文献

葛飾区葛西城址調査会『葛西城　葛西城址発掘調査報告書』（一九八三年）

（永越信吾（葛飾区教育委員会））

(1)



(2)

『平城京漆紙文書』一

（奈良文化財研究所史料第六九冊）の刊行

本書は、平城宮跡及び平城京跡から出土した漆紙文書五六点（大和郡山市教育委員会担当分を含む）を収録した報告書である。都城出土の漆紙文書の図録としては初めてのものとなる。新たに接続や出典の判明したものや、西隆寺出土のもののように今回初めて公表されるものも含まれる。

図版編には、可視光原寸大モノクロ写真を掲載するほか、赤外線デジタルカメラまたは赤外線ビデオカメラで撮影した画像を加え、遺物としてまた文字資料としてもつ漆紙文書の情報を十全に伝えるべく配慮されている。解説編では、一点ごとの詳細な解説のほか、総説において反古紙の入手経路について個別に検討し漆紙文書の史料学的位置付けを考える素材を提供する。

都城の漆紙文書は、このほか奈良市教育委員会担当の平城京跡の調査や、長岡宮・京跡でも着実に事例が蓄積されつつあり、漆紙文書が普遍的な遺物であることが明確になったといえよう。

市販は左記の通り。

奈良文化財研究所編『平城京漆紙文書』一　A4判　本文七八頁　図版二八プレート、東京大学出版会刊　六三〇〇円（税込み）